
 随 想

日中溶接友好の旅

安 藤 精 一*



1976年9月20日より10月1日まで12日間、中国机械工程学会（機械学会）溶接学会（溶接学会）の招きに応じ溶接学会訪中代表团（団長東北大学教授小林卓郎氏）の一員として、毛主席逝去直後の中国を訪問する機会を得た。中国溶接界との交流はわが国溶接界多年の懸案であつたが、1975年8月溶接学会創立50周年記念事業の一環として大阪で開催した第2回国際シンポジウム（主題・溶接技術の進歩）に、女姓2名を含む12名の中国機械学会溶接学会代表团（団長機械学会常務理事呉恕三氏）が、わが国溶接学会の招請により来日し、約1カ月にわたりわが国溶接界との交流を深めたのが契機となり、今回初の訪中が実現した。

今回の訪中は、先ず日中両国溶接界の相互の友好と理解を深め、それによつて以後の溶接関係各分野の交流のいと口を開くということにその目的を位置づけたため、事務局1名を除く団員10名はすべて溶接冶金、溶接法、溶接強度などを専攻する大学関係者で編成した。出発を前にして7月末北京に近い唐山を中心とする大地震が起り、さらに偉大な指導者毛主席の逝去という哀しむべき事態が起り、訪中の実現が危ぶまれたが中国側の非常な好意により予定通り実現することができた。

9月20日9時日航機で羽田を発ち、大阪、上海を経由して15時過ぎ（中国時間）旧知の中国溶接学会副理事長潘氏ら多数関係者の出迎えを受けて北京空港に到着した。以後北京を振出しにハルピン、上海と訪問したが毛主席逝去の哀しみの中にも至る所で暖い歓迎を受けた。

毛主席の追悼会（9月18日）が行われた天安門前には、毛主席の遺影を中心に夥しい花輪が長い列をなして飾られ、黒い腕章をつけた幼ない紅少兵から紅衛兵、解放軍さらに一般人民がひきもきらず天安門広場に集まり亡き毛主席を偲んでいた。「偉大な領袖であり導師である毛主席は永久に不朽である」「悲痛を力に換えて毛主席の教えに従つて行こう」などのスローガンは至る所で見受けられ、毛主席に対する人民の敬慕の念が如何に大きいかを痛感した。

北京では清華大学、中国科学院電工研究所分室、冶金工業省鉄鋼研究院を訪問し、さらに頤和園、万里長城、明十三陵、故宮など中国の代表的史跡を見学した。また講演、座談会を開いた。このような講演、座談会はハルピン、上海でも開催した。また宿舎の北京飯店において中国機械学会、同溶接学会、中国造船工程学会（造船学会）、上海造船所などの最高幹部級の方々の表敬訪問を受け、熱烈な歓迎を受けるとともに相互の友好と理解を深めた。このような表敬訪問はハルピン、上海でも行われた。しかし、毛主席逝去の哀しみが余りにも大きく、予定された各都市での招宴あるいは答礼の宴は一切行わないことになつた。

ハルピンでは、ハルピン焊（溶）接研究所、ハルピンボイラー工場を訪問した他、市内遊覧、松花江見学などを行つた。北京、ハルピン間は中国民航のプロペラ機を利用し、途中瀋陽（旧奉天）、長春（旧新京）空港に立ち寄つた。

上海では揚子江の支流の黄浦江沿岸にある和平飯店（旧キャセイホテル）に宿をとり、上海溶接機工場、上海造船工芸研究所、上海造船所、東風溶接棒工場を訪問した他、上海効外の馬橋人民公社を見学した。

國慶節の日当たる10月1日10時、中国民航機で上海を發ち、約2時間半で羽田に着いた。短期間で

* 日本大学生産工学部 教授

あつたが訪問先は多方面にわたり、しかも毛主席逝去直後という異常な状態での訪問ということで非常に印象深いものがあつた。

以下にそれらのいくつかについて述べて見たい。先ず訪問した大学、研究所、工場などの溶接関係のレベルは相当の高さにあることを知つたが、特にハルピン溶接研究所は従来ほとんどわが国では知られていなかったのであるが、予想以上に研究施設が整備されており、水中溶接などの研究が意欲的に行われているのに感心した。また清華大学における溶接専攻課程あるいは訪問はしなかつたが、ハルピン工大の田教授より聞いた同大学の溶接工学科における教育はかなり充実しているように感じた。

訪問の際は先ず革命委員会の主任の歓迎の挨拶があり、見学後は双方の意見を熱心に交換した。彼らは中国は発展途上にあり、また自分の職場も発展途上にあるのでいろいろ意見を聞かせて欲しいと謙遜していたが、いわゆる3結合方式により着々と成果を挙げているように感ぜられた。また訪問の際は、「日本人民は中国人民の良き友であるから仲良くするようにとの毛主席の教えを守つて、日中両国の友好に努力する。世々代々仲良くしよう。日本人民によろしく」との言葉が必ず述べられた。

3都市で開いた講演、座談会では、先ず北京において小林団長が「日本における溶接研究の現状」と題する総括的講演を行つた後、3都市で10人の団員が3つのグループに分かれてそれぞれ指示のテーマについて並行して講演、討論を行つた。彼らの熱心さには訪日の時もそうであつたが全く感心させられるものがあつた。

中国は社会主義の国であり、教育も研究も生産もすべて人民大衆に奉仕することを目的としている。文化大革命以来教育制度に大きな改革を見たが、特に注目を引いたのは大学入学に際して、高級中学卒業後2年以上農村、工場などで労働の経験を積んだ者の中から職場の大衆が適当な者を推薦し、大学が合否を決定する方式をとつていることである。また教育と研究と生産が密接な関係を持つよう運営されており、理論と実践を結びつけることに力をおいている。またいわゆる開かれた大学として、社会の工場、農村、研究所などの人達と一緒に研究なり仕事を行つている。清華大学では女子学生が溶接の卒業研究を行つており、また若い大学卒の女姓が研究室で指導的立場で活躍している。なお研究所、工場、人民公社などにおいても女姓が活躍しており、上海造船所においては溶接工450名中150名が女姓である由である。

中国はわが国の二十数倍の広大な国土とぼう大な資源に恵まれ、8億を超える人民が、今世紀末までには農業、工業、国防、科学技術の近代化を実現して、中国の国民経済を世界の最前列に立たせるといふ大きなヴィジョンをかかげ、独立自主、自力更生の精神をもつてその実現に努力している。農業を基礎とし工業を導き手として、大地に立つ中国人民の大きなエネルギーはやがてすべての分野で調和のとれた大中国を建設するものと思われる。全国の8万にのぼる人民公社も農村の向上のみならず、中国の発展に大きな力を与えているものと思われる。

国慶節の前夜、黄浦江沿岸の上海の目抜き通りの建物に一斉に明るいイルミネーションが輝き、黄浦公園の毛主席を偲ぶスローガンは、全人民の団結をうたう絵画とスローガンと変り、明るいイルミネーションの下に鮮かに照し出されていた。私は中国の人達がやつと明るさを取り戻したように感じた。

翌10月1日朝、中国の友人達の暖い見送りを受けて再会を約して中国民航機上の人となつた。懸案であつた中国訪問が極めて友好の中に無事終了し、私は感慨無量であつた。帰国後一週間で毛主席の喪が明け、4人組打倒、華国鋒政権誕生という大政変が起り、中国の事情が連日新聞紙上を賑わしている。

今回のわれわれの訪中は、日中溶接界の友好と理解をさらに深める上に極めて有意義であつたと考えている。終始通訳を初め何かと親切にお世話いただいた中国の友人の方々に深く感謝の意を表するとともに、心から多幸を祈つてやまない。

追記：溶接学会訪中代表団の中国訪問記（文、東大飯田教授）は溶接学会誌、1977年1号に掲載されているので、関心のある方は参照していただければ幸いである。